

わたしの内に清い心を創造してください、神様。
そして、新しく、確かな霊を授けてください。（詩篇51の12）

Create in me a clean heart, O God, and put a new and steadfast spirit within me.

私たちが最も必要としているのは、人間の努力や決意では生み出すことのできない清い心を創造（*）していただくことである。

「創造する」この原語は、人間が単にものを作るといったときには用いられない。そのような、神の直接的創造をあらわす言葉が、この詩篇でも用いられている。（*）

（*）上記で「創造する」という原語（ヘブル語）は、バーラー。この語は、旧約聖書全体で54回つかわれているがそのうち、32回がイザヤ書と創世記に用いられている。そしてイザヤ書では21回つかわれているうちの20回までが、バビロンからの捕囚から祖国に帰還する時代に記された40章以降に現れる。そして創世記では、宇宙と人間の創造ということに限って用いられているなど、とくに神の無からの創造や、根本的に新しくするという意味をこめて用いられている。

一般的には、よい心、きれいな心になりなさい、と言われたりするから、努力や決意でそのような心になれるように思っていることが多い。しかし、それがいかにできないかは、私たち自身をふりかえればわかることである。

清い心というようなものは、学問や経験を重ねても、またいろいろなことを本やネットなどで知っても生まれるものではない。

この詩が作られてから、3000年経ってもなお、この詩の作者—ダビデ王と伝えられている—が魂の力をこめて記したこの詩の内容は、現代の私たちにもそのまま通じるものとなっている。人間の心は、その罪深さから清められたいと、数千年を経ても変ることなく、同じこと—清い心が私たちのうちに造り出されることを求めてきた。それは言い換えると、神の霊—それこそが永遠の新しさと揺れ動くことのない堅固さを持っている—を与えてくださいという祈りである。

人間は、さまざまのもの—健康やよい家庭、能力、権力、才能、お金等々をつねに求めている。しかしそれらがいかに与えられていても、なお欠けているものこそが、この真実な清い心、変ることなき真実な霊である。それは、生まれつきや財産、地位、能力などがいかにめぐまれていてもなお、伴わない。また逆に、それらがごくわずかしき与えられていない貧しい人たち、地位の低い人たちであってもなお、真実な心で神に求めることによって豊かに与えられる。「求めよ、そうすれば与えられる」（ルカ福音書11の9）と言われている通りである。

現代の世界が直面しているさまざまな問題—それらは人間同士の差別、憎しみ、無視、敵意、あるいは権力や快楽への欲望等々がその内に潜んでいる。それは、みなこの清い真実な心が十分に与えられていないということと深くかかわっている。

それゆえに、これからの世界において、上記の聖句—清い心を私たちの魂のうちに創造し、神の清い霊をいただくことが共通の願いとなる。

御国を来させたまえ！ との「主の祈り」は、このことをも含んでいる。御国とは、神の真実な御支配のうちにありすべてのものを意味しており、それは神ご自身の清さ、また新鮮いのち、変ることなき愛そのものである。

それゆえに、この祈りは私たちのどこまでも続く祈りであり、その祈りこそは、祈る人自身と周囲の人たちにとっても喜ばしいものが注がれることにつながっていく。



このイワカガミは、淡紅色のものが多いたのですが、この写真のように白い花のものも見られます。岩場などで見られ、葉に光沢があり、鏡のようだということからつけられた名前です。

これは北海道と本州の高山に咲くもので、花茎の高さは5～10cm程度の小さな野草で、花も長さは2cm程度、花の直径は1cmほどで、ヨーロッパの教会の鐘のような形です。

この花の先端部分はたくさんの切れ込みが美しくなされていて、房のようになっています、

赤いめしべとともに、全体として気品ある美しさをたたえたものとなっていて、清い天使のような雰囲気があります。

このような、繊細なつくりは、創造者たる神ご自身の御手でなされたもので、この植物自身が生きていくためにはとくに必要とは思えないものです。朝顔のように切れ込みのない花冠であっても十分生存できるものですが、とくに神のご意志で、このような特別な美しい切れ込みがなされているのを思います。

こうした姿の美を味わうことができるのは人間だけなので、人間がこの姿に触れて神の創造の力、神ご自身のうちに秘められている無限の美の一端に触れるようにと招かれているような感じがします。（文・写真ともT. YOSHIMURA）